キャプテンストライダム 永友聖也に物申す（後編）

これはキャプテンストライダム永友聖也と JUNGLE★LIFE との戦いである

～ 前号までのあらすじ ～

2009 年 1 月、今年 1 年間のライブを“CTSR DISCO JOURNEY”と命名し、“キャプテンストライダム・ディスコ・イヤー”という年間テーマをオフィシャルサイトで発表したキャプテンストライダム。彼らがそのリリース第 1 弾として、ポップセンスと儚さを漂わせるディスコチューンシングル『ブギーナイト・フィーバー』を 5/20 に発売するという知らせを耳にした JUNGLE★LIFE 編集部スタッフが立ち上がった。「ちょっと待て！ ちょっと待ってよ永友聖也！」と。そして彼は「4th アルバム『音楽には希望がある』でキャプストは、音楽が持つ力の素晴らしさに改めて気づいたんじゃなんですか？ だったら次は当然、ジャンルなんか関係なく、有無を言わさない根源的な音楽作りに邁進するのがアーティストっていうもんですよね。別に“ディスコ”が間違ってると言ってるわけじゃないんです。でも、なぜ永友くんがそういう考えに至ったのか、僕にはわからなかったんですよね」という赤裸々な想いを手紙にしたため、JUNGLE★LIFE137 号（2009 年 4 月 1 日発行号）の誌面に掲載。要するに貴重な誌面を使って永友聖也に挑戦状を叩きつけたのだ！

というわけで、今回は永友聖也と JUNGLE★LIFE のガチバトル（※ 1）。永友聖也は何を考え、何を想い、そして先に何を見ているのか？ 都内某所で約 2 時間に渡って繰り広げられた取材は、終始両者の怒号が飛び交い、時に鮮血が飛び散り、幼子が泣き叫ぶ…まさに阿鼻叫喚、地獄絵図と化したのだった（※ 2）。

「『音楽には希望がある』というアルバムを作って希望に満ち溢れていたハズなのに、曲を作ったりするのが苦痛になった時期があったんですよ」

永友：前号の JUNGLE★LIFE 読んで、よっぽど訴えようかと思ったんですけどね。法的手段に出ようかなと。

●アハハハ（笑）。

永友：まあでもそれは大人げないので、受けて立とうと思います。

●では早速ですが、キャプスト（※ 3）は 4th アルバム『音楽には希望がある』を昨年 6 月にリリースし、秋にレコ発ツアー“LIVE TOUR 2008 明日に向かって踊れ！”を行いましたよね。その後、今年になってオフィシャルサイトで“今年はディスコでいくぜ”的な宣言をして。そこでちょっと僕は「え？」と思ったんですよね。違和感があったわけじゃなくて、流れとして「え？」と。

永友：うんうん。

●『音楽には希望がある』の取材では 3 人が「音楽が持つ力の素晴らしさを改めて実感した」とか言ってたので、次はジャンルなんか関係なく、有無を言わさない根源的な音楽作りに邁進するのかなって思ってたんです。

永友：なるほど。

●だから『音楽には希望がある』リリース以降、どういう経緯があったのかなと。

永友：『音楽には希望がある』を出して、ツアーもやったりライブをやったりして。そんな中、次の制作も並行して着手したわけですよ。

●はい。

永友：『音楽には希望がある』はおっしゃる通り、もう“自分たちそのもの”みたいな。実際に希望に満ち溢れてリリースして、バンド活動に取り組んでいったんですよ。

●そうでしたよね。なんか吹っ切れた感じはしてました。

永友：そこで曲を作るんですが…なんていうのかな…まず自分たちが『音楽には希望がある』に込めたモノとか表現したいモノっていうのと、色んなリアクションだったり感触だったりと、その間になんとなくズレみたいなものを感じて。

●ズレというと？

永友：アルバムの前にシングルで「人間ナニモノ !?」という曲（※ 4）を出して。自分でもあの曲はやりたいことやれたし、すごく大好きで大事な曲なんです。でもそれと聴いている人との受け取り方っていうのは…失敗したとか間違った受け取り方をされているというわけじゃないんですけど、自分が思ってる感じとはちょっと違ったんです。

●そう感じたのはいつ頃ですか？

永友：ライブでやっていく中でですね。いちばん最初にライブで「人間ナニモノ !?」をやったのは去年の 4 月なんですけど（※ 5）、“すごくポジティブに表現したい”という気持ちが自分たちの中に常にあって、あの曲もそういう気持ちで作ってたんですけど、“聴いてる人がどれくらい楽しんでくれているのかな？”と考えたとき、若干自分が理想としている音楽のカタチと違う…「違う」っていうニュアンスでもないんですけど、ちょっとズレがあるというか。

●それは何なんでしょうね？

永友：わかり易く言うと、「マウンテン・ア・ゴーゴー」（※ 6）を演奏しているときと「人間ナニモノ !?」を演奏しているときでは、お客さんの顔が違うんですよ。

●あ、なるほど。

永友：「人間ナニモノ !?」は叩きつけるような曲で、もちろん必要ではあるんですけど、今後はそういう表現だけをしていくのか？ と考えたときに、果たしてミュージシャンとしての満足が得られるのかと。僕は割と悩みがちなタイプなんで（※ 7）。

●そうですね。

永友：ライブやってるときは楽しいんですよ。でも次の曲を作ろうっていうときに、「人間ナニモノ !?」と同じ様な、自分の衝動をそのまま剥き出しにするようなやり方で曲を書いていっていいんだろうか？と。僕の中で心がダークサイド（※ 8）に堕ちてしまって。

●そうだったんですね。

永友：『音楽には希望がある』というアルバムを作って希望に満ち溢れていたハズなのに、曲を作ったりするのが苦痛になった時期があったんですよ。去年の夏頃とか。

キャプテンストライダム(左から)
Ba./Cho.梅田啓介（ウケダケイスケ）
Vo./G.永友聖也（ナガトモセイヤ）
Dr./Cho.菊住守代司（キクズミモリヨシ）

●曲作りが苦痛って、今までもそんなことはあったんですか？

永友：煮詰まることはあったんですけど、苦痛っていうのは初めてでしたね。バンドを続けていくということに対して、次は何を見定めていこうかっていうところで苦しかったのは初めてだったかも。

●そう考えると、「人間ナニモノ !?」は作り方が特殊だったんでしょうか？

永友：それまでとは違いましたね。自分の中で沸き上がってきたモノをおもしろく見せようっていう作り方を僕はやってきたんですけど、「人間ナニモノ !?」は沸き上がってきたモノをそのまま剥き出しで出したっていう。でも自分が音楽をやっていく目的とか、キャプテンストライダムで表現したいこととはちょっと違うモノだった。誤解を恐れずに言うならば、あれは“永友聖也の曲”だったんです。

●ああ、なるほど。

永友：自分の中のモノを引き出せたとかいう意味ではすごく大事な経験だったんですけど…うん、そこのギャップなのかな。聴いている人がどうとかいう以前に、“自分の衝動をどうバンドで表現するか？”

【読者と地球に優しく永友聖也に厳しい渾身のキャプスト註釈】

※ 1：ガチバトル　ガチンコトークバトルの略。JUNGLE★LIFE は過去にバラエティ番組『ぐるナイ』のゴチバトルをパロッた（パクッた）キャプストゴチバトルを 2 回開催し、誌面に掲載した（第 1 回は下北沢で寿司バトル、第 2 回は麻布で中華バトル）。敗者は 2 回とも永友。自腹合計は ¥58,890。

※ 2：地獄絵図　賢明な読者なら既にお気づきのことと思うが、もちろん嘘である。

※ 3：キャプスト　キャプテンストライダムの略。キャプやライダム、CTSR とも略す。以前「キでいいと思う」と誌面に書いたら少数の読者から賛同を得たが定着しなかった。ちなみに、このインタビュー中、永友は自らのバンド名を 1 度たりとも略していない。案外そういうものなのか。

※ 4：「人間ナニモノ !?」　キャプストが 2008 年 4 月に発表した 10 枚目のシングル曲。パンチあるジャケが印象的。ジャケにメンバーが登場するのは 2006 年 6 月リリース 6th シングル『風船ガム』以来、2 度目（ただし『風船ガム』はメンバー 3 人だが『人間ナニモノ !?』は永友のみ）。

※ 5：「人間ナニモノ !?」ライブ初披露　2008 年 4 月に渋谷 AX で開催された“BEAT CRUSADERS presents 『SHOOT TO THRILL』”で演奏した。驚愕の“人間コール”に観客は度肝を抜かれた。

※ 6：「マウンテン・ア・ゴーゴー」　2003 年 8 月リリースの 1st シングル曲。後に歌詞を変えた「マウンテン・ア・ゴーゴー・ツー」でメジャーデビューを果たす。“ランランランスがホームラン”という珍妙な歌詞はシーンに風穴を開けた。ちなみにランスとは 1987 年に広島東洋カープに入団した外国人選手。ホームランか三振かという非常に博打性の高い助っ人。本名はリチャード・ランセロッティ。

※ 7：悩みがち　悩めるお年頃なのである。

※ 8：ダークサイド　スター・ウォーズ用語。ダース・シディアスが操る暗黒面のこと。暗黒面とは人間であれば誰もが持っている“裏”や“弱さ”のこと。もともとはジェダイだったアナキン・スカイウォーカーはダークサイドに堕ち、悪役の代表格とも言えるダース・ベイダーになった。

「初めてのライブをやったとき、“自分も幸せになれるしお客さんも喜んでくれる。なんて楽しいことなんだ”と思ったんです」

っていう部分。キャプテンストライダムには梅田も守代司も居て、３人で音を出すときにもっと楽しめるモノを探してた。

●個人とキャプストの違いというか。

永友：うん。なんかそれまで無意識にやれていたことが、ちょっとバランス崩しちゃったのかもしれないですね。当然バンドでやると別人格になったりとか、自分じゃない人物になって歌詞を書いたりすることも無意識にやるんですけど、そこのバランスが時々おかしかったのかもしれない。

●なるほど。去年の夏頃はかなり苦しい時期だったんですね。

永友：そうですね。まあ曲は作ってたんですよ（※9）。歌詞も書いていたし。でも３人でやっていく中での手応えみたいなモノを感じられなかったんですよね。当然自分達でも「音楽には希望がある」を超えようとするわけですけど、曲として全然超えてなかったんです。

●チンカスだと（※10）。

永友：ですね（※11）。梅田も守代司も曲を書いていたので、色んな曲は出来てくるんですけど、僕の曲も含めてどれもヌルいなって。

●ふむふむ。

永友：“いやー、これはマズいな”と。時間は結構あったんですけど、ヌルい曲しか出来てなくて。で、「これどうする？」みたいな。究極を言っちゃうと、ここで前のアルバムを超えられなかったらバンドをやっていく意味が無いんじゃないか？ と。

●土壇場ですね。

永友：はい。中途半端にやるんだったら解散したっていいくらいの感じになっていきましたね（※12）。

●それで、キャプスト史に残る殴り合い喧嘩が？

永友：いや（笑）、じゃあ一度個々で考えようと。ちょっと時間を置いてひとりひとり考えたんです。僕も色々と考えていく中で、もう１回デビュー曲を作りたいなと思って。前作までの流れとかこれまでの歴史とか色々あるけど、そうじゃなくて今本当に自分たちがやりたいことや表現したいことを作るつもりで、もう１回デビュー曲を作ろうと。

●リセットするという感覚ですか？

永友：いやリセットじゃないんですけど、マインド的にキャプテンストライダムを組んだときの気持ちに戻るというか、自分たちがワクワク出来ることを考えてみようって。

●はい。

永友：それでテーマ会議を開いて（※13）、“ディスコ”というキーワードが出てきたんですよね。

●なぜ“ディスコ”だったんですか？

永友：「マウンテン・ア・ゴーゴー」とか「キミトベ」（※14）って自分たちの原点だし、そこでいちばん聴いている人たちと繋がってるという実感がある曲で。あの２曲はたまたまディスコっぽいサウンドだったんですけど、そこに何か秘密があるんじゃないかっていう。自己分析みたいなところから端を発して。

●はいはい。

永友：そこで“ディスコ”っていうキーワードが出てきて。その後、ディスコを研究したり、“ディスコ”と呼ばれるモノの歌詞を紐解いていったりしたんです（※15）。そこで気づいたんですけど、“ディスコ”と呼ばれる曲の歌詞って、踊って楽しい感じだったり発散するような内容じゃなくて、這い上がろうとする歌詞が多いんですよ。背後に悲しみがあるっていうか。The Bee Geesの「Staying Alive」とかまさにそうだし。

●なるほど。ちょっと“ディスコ”という言葉に対するイメージが変わる話ですね。

永友：「Staying Alive」は逆境に立っている人間が“それでも生きていこう”っていう歌詞なんですよね。それがああいうサウンドで表現されていたりして。昔のアメリカのディスコブームの頃とかも、不況だったりして。仕事がない若者とかは、それでも週末にディスコで踊ってスターになったり、のし上がっていったりして（※16）。そういうスピリットというか、「マウンテン・ア・ゴーゴー」ってそうだったなと思ったんです。歌詞に“夢に破れた人の欠片が　山のように見える”とありますけど。

●ああ〜、確かに。

永友：自分たちの考える“ディスコ感”がそういうところで繋がってるというか。キャプテンストライダム流の“ディスコ”ってそういうモノなのかなと。

●ということは、キャプストの“ディスコ”というのは、ジャンルを指しているわけではない。

永友：そうですね。サウンドありきというよりも、踊れるということだったり。別に四つ打ちじゃなくてもディスコの曲はあると思うんです。だからサウンドが重要ではなくて、“音楽で踊る”ということに対するチャレンジなんですよね。

●なるほど。それをテーマとして見つけたときに、目の前がパッと開けた？

永友：そうですね。

●永友くん自身が逆境に立ってたから？

永友：それはあると思うんですよ。キャプテンストライダムを続けていくのがしんどいと感じていたりして、“キャプテンストライダムでやりたいことって何だろう？”と考えたら、音楽で踊らせることだったりしたんです。たぶん最初にバンドを始めたときの衝動と近いというか。さっき言いましたけど、もう１回デビュー曲のつもりで曲を作ろうと考えたときに、自分の中で色んなモノが削ぎ落とされた感覚があって。

●はいはい。

永友：昔の自分の作品を聴いたりもしたし、自分が好きだった音楽を聴いたりもしたんです。そんなとき、単純ですけど聴いたら踊れたり、楽しくなったりするモノを作りたいなと思ったんです。

●そういう心境的な経緯があったんですね。さっき「中途半端にやるんだったら解散したっていいと思った」と言ってましたけど、1999年から始まったキャプストの歴史の中で、今まで解散のことを考えたことはあったんですか？

永友：いや、こういう感じで心が折れそうになったのは初めてかも知れないですね。サラリーマンやりながらバンドをやってたときは、時間的な事情で難しい局面とかありましたけど、でもバンドは続けていきたいと思っていて。今回も続けていきたいという気持ちはあったんだけど、そこが上手く表現出来ないっていうか、気持ちはあったけど作品がついてこないっていう。そんな感じは初めてだったかもしれない。

●かなり辛い状況ですね。

永友：辛いっていうか、途方に暮れてた感じですね。でも絶対になんとかなると信じてやってはいたんですが。

●梅田くんと守代司くんはどうだったんですか？

永友：「次は踊れる曲を作ろう」となったとき、バンドとして盛り上がれたんですよね。「あ、それだよね」っていう。

●ピンときた？

永友：うん。ピンときたかんじ。

●３人とも同じ様な心境に陥ってたんですか？

永友：うーん、どうなんだろうな…。『音楽には希望がある』を出して、次に色々と曲を作ってるとき、“こんなもんじゃないだろう”っていうフラストレーションはあったと思いますね。

●昨年９月に始まった“LIVE TOUR 2008 明日に向かって踊れ！”のツアータイトルは、“ディスコ”というキーワードが決まる前から発表になってましたよね。でもこのツアータイトルと2009年のテーマはリンクしていると感じたんですが。

マネージャー：それまでは記号っぽいツアータイトルが多かったので、昨年のツアーはメッセージを込めようという想いがあったんです。

永友：そうそう。今まではバカっぽいツアータイトルが多くて（※17）。もちろんツアータイトルを決めた時点で“ディスコ”というキーワードが決まっていたわけじゃなかったんですけど、なんか“身体で行く感じ”を出したかったというか。

●実際、“LIVE TOUR 2008 明日に向かって踊れ！”はどうだったんですか？

永友：アルバムを出してツアーに出る前にダークサイドに堕ちてたもんだから、出る前は不安だったんですよ。でも新曲をやらなきゃ意味がないと思ってたので、たくさん作った曲の中から３〜４曲を実際にやってみて。そしたら初めての曲なのにお客さんが踊ってくれたんですよね。

●はい。

永友：今回のシングルには入ってないんですけど、メンバーそれぞれが作った曲を１曲ずつと、アンコールの最後に１曲やって。そこで踊ってるお客さんの姿を見て、僕の中ですごくグッとくるモノがあって。“あ、これだなぁ”って。

●夏に色々と悩んで不安になったけど、ツアーで実感したんでしょうね。

永友：うん。だからツアーを経た後で“ディスコ”というキーワードが出てきたんでしょうね。今から考えれば、どん底になってたのは自分の中で“曲を作らなきゃ”ってダークサイドに落ち込んでいってただけで、聴いてる人の事とかライブでやったときのリアクションとかを考えているようで実は実感してなかったんでしょうね。

●ああ〜。

永友：でもそれをライブで実感したりして、自分たちのやりたいことと聴いてくれてる人の感覚が繋がっている感じがあって。今までで一番最高なツアーができたんですよ。

●そして年明け、オフィシャルサイトで“キャプテンストライダム・ディスコ・イヤー”というテーマを発表するわけですね。その時点ではもう曲が形になってたんですか？

永友：そうですね。「ブギーナイト・フィーバー」の原型とかは既に見えてて。

●その「ブギーナイト・フィーバー」と「北京原人」（M-2）（※18）ですけど、歌詞から今まで以上にエロスを感じたんですよね。

永友：最近はみなぎってますからね（※19）。

●例えば「ブギーナイト・フィーバー」に“恋人同士みたいに　抱き合って踊ろうよベイベー / 素顔のままでいいよ　じゃれあって口づけしようよ”という歌詞がありますよね。要するに恋人同士じゃないのに口づけしようと言ってる。

永友：そうなんですよ（※20）。

●「北京原人」とかもうモロで、“朝まで　ニャンニャンニャン”とか“そう交わろうぜ！”とか“増やそうぜ　種族保存の本能全開！”とか言ってる（笑）。でもエロいことって、音楽を聴いて踊る感じと共通してるのかなって。

永友：エロは本能に直結してますからね。それで生物の歴史が成り立ってるわけだし。“踊る”ということもそうだし、“音楽”も本能に近いところにあると思うんですよ。なんで音楽を聴いて気持ちいいと感じるのか？ と考えたとき、理屈は付けられそうで説明出来ないですもんね。必要だから聴いてしまう、踊ってしまうっていう。エロも近いところにありますよね。

●作詞の部分でエロは意識したんですか？

永友：いや、特に意識はしてなかったんです。でも“ディスコ”っていう言葉だったり、身体で感じる音楽とか踊れる音楽をイメージして歌詞を書いていったら自然に出てきましたね。

●なるほど。さっき「“ディスコ”といってもサウンドだけが重要ではなくて、“音楽で踊る”ということに対するチャレンジなんだ」と言ってましたけど、今後はそれを落とし込んでいく作業になるんでしょうか。

永友：うん。やっぱり身体を動かすっていうか、踊れる曲を極めていきたいです。もちろんそれはサウンドも含めての話なんですが。

●何なんでしょうね、踊れる曲って。

永友：それを探す旅なんですよね。だから“CTSR DISCO JOURNEY”…“JOURNEY”っていう言葉を使ってて。その第１弾として今回のシングルを作ったんです。“踊れる曲って何だろう？”と考えたとき…そういう曲を作ったら自分の中で何かを爆発させられるんですよ。「ブギーナイト・フィーバー」もそうなんですけど、自分の中で表現したかったモノといちばんいい形で繋がった手応えがあるんです。さっきも言いましたけど、逆境だったり悲しみだったり怒りだったりを表現しようというとき、“ディスコ”な曲で表現したらいちばん自分的には価値を感じることが出来るんです。

●ということは、表現したいモノの根幹は今までと何ら変わってないんですね。

永友：そうなんですよ。僕の場合、ある意味ちょっと後ろめたいモノを爆発させるっていう感覚なんです。

●なんか鬱屈としたモノがあるんですか？

永友：うん。

●永友くんの性格から考えて、自分の中の鬱屈としたモノを普段の生活で爆発させたりすることは無いんじゃないですか？

永友：日常生活では基本的に無いですね（※21）。

●礼儀正しくて人の領域に土足で入っていくタイプでは絶対にないですよね。

永友：隠しがちだなっていう自覚はあります。

●隠しがちというと？

永友：我慢するっていうか。すごく小さいことで言えば、例え不味くても出されたモノは全部食べる。給食とか残したことなかったです（※22）。

●我を出さない？

永友：そうですね。

●無理して生きてきたんでしょうか（笑）。

永友：自覚はないんですけどね（笑）。でもバンドを組んで、曲を作ったりライブをやったりしたときに、無理なく爆発させることが出来るっていう感覚あって。

●“無理してる”という自覚はなかったけど、バンドでは“無理がない”という自覚があった。

永友：初めてライブをやったとき、もちろんお客さんは少なかったですけど“自分も幸せになれるしお客さんも喜んでくれる。どっちも幸せになれるんだな。なんて楽しいことなんだ”と思ったんですよね。

●ああ〜、なるほど。そこが永友くんにとってのスタート地点か。

永友：うん、原点はそこなんです。だから去年アルバムをリリースした後の曲作りで悩んでいたのは、そこにギャップを感じていたからだったと思います。

●永友くんには息抜きが必要なんじゃないですか？

永友：アハハ（笑）。

●そういう性格のような気がする。

永友：確かに切り換えが下手なんだと思います。

●でしょうね（笑）。

永友：だから今は“キャプテンストライダムでやりたいことはこれだ！”っていう手応えを感じてて、それが“ディスコ”だったんです。

●よくわかりました。物申してすみませんでした。

永友：いえいえ（※23）。

Single『ブギーナイト・フィーバー』

ジャケット写真は近日公開予定!! 震えて待て!!

SMAR
[初回生産限定盤：CD+DVD]
AICL-2022/2023
¥1,500（税込）
[通常盤：CD]
AICL-2024
¥1,200（税込）
2009.5.20 Release

【読者と地球に優しく永友聖也に厳しい久々のキャプスト註釈】

※**9：曲は作っていた**　2007年の夏に引き続き、2008年の夏も永友宅に集まって３人でご飯を食べたりしていた。曲もちょっと作った。

※**10：チンカス**　暴言だと思う。

※**11：ですね。**　その暴言を軽く受け流す永友。大人になった。男子三日会わざれば刮目して見よ。

※**12：解散したっていい**　解散の話が出ていたことはマネージャーも知らなかった独占スクープ。JUNGLE★LIFEはこうやってキャプストの独占スクープを毎回スッパ抜いている。

※**13：テーマ会議**　メンバー個々、紙に箇条書きでアイデアをまとめてきた。実にキャプストらしいエピソードである。

※**14：「キミトベ」**　2005年10月にリリースした4th シングル曲。ライブでは観客が両手を上げ、左右に高速で振りながらジャンプするという異様な現象が起きる。

※**15：ディスコ**　ディスコブームが始まったのは60年代のニューヨーク / ゲイ・シーンであったとされる。ゲイや黒人の間で発展を遂げ、70年代には世界的に広まった。日本では1977年に映画『サタデー・ナイト・フィーバー』のヒットを期に広まる。ちなみに３人はゲイではないらしい。

※**16：ディスコで踊ってスター**　おそらく映画『サタデー・ナイト・フィーバー』のことを言っている。

※**17：ツアータイトル**　“ポカリンピック TOUR”や“SHOCK TREATMENT TOUR”、“全開チャック●●ツアー”など、バカっぽいタイトルが多い。

※**18：「北京原人」**　「ブギーナイト・フィーバー」のカップリング。梅田作詞 / 作曲による奇天烈な原人ロック。ウゴウゴ言ってる。

※**19：みなぎっている**　永友だって男だ。

※**20：口づけ**　「むしろ口づけの方がエロいですからね」と言う永友に、口づけに対する想いを熱く語るインタビュアー。もちろんカットした。

※**21：基本的に無い**　しかしメンバーには気づかれているらしい。ダークサイド永友は顔を見ればわかるとか。

※**22：全部食べる**　本当にすごく小さい例を出した。

※**23：いえいえ**　この辺が無理している気がする。

※**豆知識１**　梅田はつい最近マハラジャ（MAHARAJA SALOON King&Queen）に行ってきた。「取材も兼ねて行った」と非常に梅田らしいコメントを残している。

※**豆知識２**　最近の永友は平将門にハマっている。1976年に放送され、2007年に全話収録のDVDが発売された NHK 大河ドラマ『風と雲と虹と』（原作は海音寺潮五郎の小説『平将門』/『海と風と虹と』）を観たのがきっかけ。東京都千代田区大手町の首塚や神田明神にもお参りに行った。

※**豆知識３**　そして最近の永友は着物を着てフラフラしているらしい。もともと永友の祖父が着物好きだったらしく、思い立って実家から送ってもらい、仕立てし直したとのこと。着物で電車にも乗ったりしている。「ウチのおじいちゃんが着てたモノなので歴史を受け継いでいる感じがするんですよ。末裔なんだ、っていう」とは永友の弁。

取材と文：山中 毅
http://www.ctsr.jp/